畫の悲み

国木田独歩

畫を好かぬ小供は先づ少ないとして其中にも自分は小供の時、何よりも畫が好きであつた。(と岡本某が語りだした)。

好きこそ物の上手とやらで、自分も他の學課の中畫では同級生の中自分に及ぶものがない。畫と數學とならら、憚りながら誰でも來いなんて、自分も大に得意がつて居たのである。しかし得意といふことは多少競爭を意味する。自分の畫の好きなことは全く天性といつても可からう、自分を獨で置けば畫ばかり書いて居たものだ。

獨で畫を書いて居るといへば至極温順しく聞える

が、其癖自分ほど腕白者は同級生の中にないばかりか、校長が持て餘して數々退校を以て嚇したのでも全校第一といふことが分る。

全校第［＃ルビの「たい」に「ママ」の注記］一腕白でも數學でも。しかるに天性好きな畫では全校第一の名譽を志村といふ少年に奪はれて居た。この少年は數學は勿論、其他の學力も全校生徒中、第二流以下であるが、畫の天才に至つては全く並ぶものがないので、僅に壘を摩さうかとも言はれる者は自分一人、其他は悉く志村の天才を崇め奉つて居るばかりであつた。ところが自分は志村を崇拜しない、今に見ろとい

ふ意氣込で頻りと勵げんで居た。
元來志村は自分よりか歳も兄、級も一年上であったが、自分は學力優等といふので自分の居る級と志村の居る級とを同時にやるべく校長から特別の處置をせられるので自然志村は自分の競爭者となって居た。
然るに全校の人氣、校長教員を始め何百の生徒の人氣は、温順しい志村に傾いて居る、志村は色の白い柔和な、女にして見たいやうな少年、自分は美少年ではあつたが、亂暴な傲慢な、喧嘩好きの少年、おまけに何時も級の一番を占めて居て、試驗の時は必らず

最優等の成績を得る處から教員は自分の高慢が癪に觸り、生徒は自分の壓制が癪に觸り、自分にはどうしても人氣が薄い。そこで衆人の心持は、せめて畫でなりと志村を第一として、岡本の鼻柱を挫いてやれといふ積であつた。自分はよく此消息を解して居た。そして心中ひそかに不平でならぬのは志村の畫必ずしも能く出來て居ない時でも校長をはじめ衆人がこれを激賞し、自分の畫は確かに上出來であつても、さまで賞めて呉れ手のないことである。少年ながらも自分は人氣といふものを惡んで居た。

或日學校で生徒の製作物の展覽會が開かれた。其

出品は重に習字、※畫［＃「圖」の「回」に代えて「面から一、二画目をとったもの」、466-8］、女子は仕立物等で、生徒の父兄姉妹は朝からぞろ〳〵と押かける。取りどりの評判。製作物を出した生徒は氣が氣でない、皆なそは〳〵して展覽室を出たり入つたりして居る自分も此展覽會に出品する積りで畫紙一枚に大きく馬の頭を書いた。馬の顏を斜に見た處で、無論少年の手には餘る畫題であるのを、自分は此一擧に由て是非志村に打勝うといふ意氣込だから一生懸命、學校から宅に歸ると一室に籠つて書く、手本を本にして生意氣にも實物の寫生を試み、幸ひ自分の宅から一

丁［＃ルビ抜けはママ］ばかり離れた桑園の中に借馬屋があるので、幾度となく其處の廐に通つた。輪廓といひ、陰影と云ひ、運筆といひ、自分は確にこれまで自分の書いたものは勿論、志村が書いたものゝ中でこれに比ぶべき出來はないと自信して、これならば必ず志村に勝つ、いかに不公平な教員や生徒でも、今度こそ自分の實力に壓倒さるゝだらうと、大勝利を豫期して出品した。

　出品の製作は皆な自宅で書くのだから、何人も誰が何を書くのか知らない、又互に祕密にして居た殊に志村と自分は互の畫題を最も祕密にして知らさな

いやうにして居た。であるから自分は馬を書きながらも志村は何を書いて居るかといふ問を常に懐いて居たのである。

さて展覧會の當日、恐らく全校數百の生徒中尤も胸を轟かして、展覧室に入つた者は自分であらう。※畫室［＃「圖」の「回」に代えて「面から一、二画目をとったもの」、467-4］は既に生徒及び生徒の父兄姉妹で充満になつて居る。そして二枚の大畫(今日の所謂る大作)が並べて掲げてある前は最も見物人が集つて居る二枚の大畫は言はずとも志村の作と自分の作。

一見自分は先づ荒膽を抜かれてしまつた。志村の

畫題はコロンブスの肖像ならんとは！　而もチョークで書いてある。　元來學校では鉛筆畫ばかりで、チョーク畫は教へない。自分もチョークで畫くなど思ひもつかんことであるから、　畫の善惡は兎も角、先づ此一事で自分は驚いてしまつた。その上ならず、馬の頭と髭髯面を被ふ堂々たるコロンブスの肖像とは、一見まるで比べ者にならんのである。且つ鉛筆の色はどんなに巧みに書いても到底チョークの色には及ばない。畫題といひ色彩といひ、自分のは要するに少年が書いた畫、志村のは本物である。技術の巧拙は問ふ處でない、掲げて以て衆人の展覧に供すべき製作として

は、いかに我慢強い自分も自分の方が佳いとは言へなかつた。さなきだに志村崇拝の連中は、これを見て歡呼して居る。『馬も佳いがコロンブスは如何だ！』などいふ聲が彼處でも此處でもする。

自分は學校の門を走り出た。そして家には歸らず、直ぐ田甫へ出た。止めやうと思ふても涙が止まらない。口惜いやら情けないやら、前後夢中で川の岸まで走つて、川原の草の中に打倒れてしまつた。

足をばた〳〵やつて大聲を上げて泣いて、それで飽き足らず起上つて其處らの石を拾ひ、四方八方［＃ルビ抜けはママ］に投げ付けて居た。

かう暴れて居るうちにも自分は、彼奴何時の間にチョーク畫を習つたらう、何人が彼奴に教へたらうと其ればかり思ひ續けた。

泣いたのと暴れたので幾干か胸がすくと共に、次第に疲れて來たので、いつか其處に臥てしまひ、自分は蒼々たる大空を見上げて居ると、川瀬の音が淙々として聞える。若草を薙いで來る風が、得ならぬ春の香を送つて面を掠める。佳い心持になつて、自分は暫時くぢつとして居たが、突然、さうだ自分もチョークで畫いて見やう、さうだといふ一念に打たれたので、其儘飛び起き急いで宅に歸へり、父の許を得て、直ぐ

チョークを買ひ整へ畫板を提げ直ぐ又外に飛び出した。

この時まで自分はチョークを持つたことが無い。どういふ風に書くものやら全然不案內であつたがチョークで書いた畫を見たことは度々あり、たゞこれまで自分で書かないのは到底未だ自分どもの力に及ばぬものとあきらめて居たからなので、志村があの位ゐ書けるなら自分も幾干か出來るだらうと思つたのである。

再び先の川邊へ出た。そして先づ自分の思ひつい た畫題は水車、この水車は其以前鉛筆で書いたことがあるので、チョークの手始めに今一度これを寫生し

てやらうと、堤を辿つて上流の方へと、足を向けた。

水車は川向にあつて其古めかしい處、木立の繁みに半ば被はれて居る案排、蔦葛が這ひ纏ふて居る具合、少年心にも面白い畫題と心得て居たのである。これを對岸から寫すので、自分は堤を下りて川原の草原に出ると、今まで川柳の蔭で見えなかつたが、一人の少年が草の中に坐つて頻りに水車を寫生して居るのを見つけた。自分と少年とは四五十間隔たつて居たが自分は一見して志村であることを知つた。彼は一心になつて居るので自分の近いたのに氣もつかぬらしかつた。

おや〳〵、彼奴が來て居る、どうして彼奴は自分の先へ先へと廻はるだらう、忌ま〳〵しい奴だと大に癪に觸つたが、さりとて引返へすのは猶ほ慊だし、如何して呉れやうと、其儘突立つて志村の方を見て居た。

　彼は熱心に書いて居る草の上に腰から上が出て、其立てた膝に畫板が寄掛けてある、そして川柳の影が後から彼の全身を被ひ、たゞ其白い顏の邊から肩先へかけて楊を洩れた薄い光が穩かに落ちて居る。これは面白ろい、彼奴を寫してやらうと、自分は其儘其處に腰を下して、志村其人の寫生に取りかゝつた。

それでも感心なことには、畫板に向うと最早志村もいま〱しい奴など思ふ心は消えて書く方に全く心を奪られてしまつた。

彼は頭を上げては水車を見、又畫板に向ふ、そして折り〱左も愉快らしい微笑を頰に浮べて居た彼が微笑する毎に、自分も我知らず微笑せざるを得なかつた。

さうする中に、志村は突然起ち上がつて、其拍子に自分の方を向いた、そして何にも言ひ難き柔和な顔をして、につこりと笑つた。自分も思はず笑つた。

『君は何を書いて居るのだ、』と聞くから、

『君を寫生して居たのだ。』
『僕は最早水車を書いてしまつたよ。』
『さうか、僕は未だ出來ないのだ。』
『さうか、』と言つて志村は其儘再び腰を下ろし、もとの姿勢になつて、
『書き給へ、僕は其間にこれを直すから。』
自分は畫き初めたが、畫いて居るうち、彼を忌ま〱しいと思つた心は全く消えてしまひ、却て彼が可愛くなつて來た。其うちに書き終つたので、
『出來た、出來た！』と叫ぶと、志村は自分の傍に來たり、

『をや君はチョークで書いたね。』

『初めてだから全然畫にならん、君はチョーク畫を誰に習つた。』

『そら先達東京から歸つて來た奥野さんに習つた然し未だ習ひたてだから何にも書けない。』

『コロンブスは佳く出來て居たね、僕は驚いちやツた。』

それから二人は連立つて學校へ行つた。此以後自分と志村は全く仲が善くなり、自分は心から志村の天才に服し、志村もまた元來が温順しい少年であるから、自分を又無き朋友として親しんで呉れた。二人

［#ルビ抜けはママ］で畫板を携へ野山を寫生して歩いたことも幾度か知れない。

　間もなく自分も志村も中學校に入ることゝなり、故郷の村落を離れて、縣の中央なる某町に寄留することゝなつた。中學に入つても二人［#ルビ抜けはママ］は畫を書くことを何よりの樂にして、以前と同じく相伴ふて寫生に出掛けて居た。

此某町から我村落まで七里、若し車道をゆけば十三里の大迂廻になるので我々は中學校の寄宿舎から村落に歸る時、決して車に乘らず、夏と冬の定期休業毎に必ず、此七里の途を草鞋がけで歩いたものである。

七里の途はたゞ山ばかり、坂あり、谷あり、溪流あり、淵あり、瀧あり、村落あり、兒童あり、林あり、森あり、寄宿舍の門を朝早く出て日の暮に家に着くまでの間、自分は此等の形、色、光、趣きを如何いふ風に畫いたら、自分の心を夢のやうに鎖ざして居る謎を解くことが出來るかと、それのみに心を奪られて歩いた。志村も同じ心、後になり先になり、二人で歩いて居ると、時々は路傍に腰を下ろして鉛筆の寫生を試み、彼が起たずば我も起たず、我筆をやめずんば彼も止めないと云ふ風で、思はず時が經ち、驚ろいて二人とも、次の一里を駈足で飛んだこともあつた。

爾來數年、志村は故ありて中學校を退いて村落に歸り、自分は國を去つて東京に遊學することゝなり、いつしか二人の間には音信もなくなつて、忽ち又四五年［＃ルビ抜けはママ］經つてしまつた。東京に出てから、自分は畫を思ひつゝも畫を自ら書かなくなり、たゞ都會の大家の名作を見て、僅に自分の畫心を滿足さして居たのである。

　處が自分の二十の時であつた、久しぶりで故郷の村落に歸つた。宅の物置に曾て自分が持あるいた畫板が有つたの［＃（を脱カ）の注記］見つけ、同時に志村のことを思ひだしたので、早速人に聞いて見ると、驚く

まいことか、彼は十七の歳病死したとのことである。

自分は久しぶりで畫板と鉛筆を提げて家を出た。故郷の風景は舊の通りである、然し自分は最早以前の少年ではない、自分はたゞ幾歳かの年を増したばかりでなく、幸か不幸か、人生の問題になやまされ、生死の問題に深入りし、等しく自然に對しても以前の心には全く趣を變へて居たのである。言ひ難き暗愁は暫時も自分を安めない。

時は夏の最中自分はたゞ畫板を提げたといふばかり、何を書いて見る氣にもならん、獨りぶら〳〵と野末に出た。曾て志村と共に能く寫生に出た野末に。

闇にも歡びあり、光にも悲ありあり麥藁帽の庇を傾けて、彼方の丘、此方の林を望めば、まじ〳〵と照る日に輝いて眩ゆきばかりの景色。自分は思はず泣いた。

底本：「定本　国木田独歩全集　第二巻」学習研究社
　　１９６４（昭和39）年７月１日初版発行
　　１９７８（昭和53）年３月１日増訂版発行
　　１９９５（平成７）年７月３日増補版発行
底本の親本：「運命」佐久良書房
　　１９０６（明治39）年３月発行
初出：「青年界」第一巻第二號
　　１９０２（明治35）年８月１日発行
入力：鈴木厚司
校正：小林繁雄
２００１年12月21日公開

２００４年７月３日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。